



南紀熊野ジオパーク
NANKI KUMANO GEOPARK

南紀熊野の民話
彦五郎の堤

彦五郎の堤

南紀熊野の民話



作 南紀熊野ジオパーク推進協議会
絵 大江 みどり

南紀熊野の民話
彦五郎の堤

初版発行 2025年3月
制 作 南紀熊野ジオパーク推進協議会
〒649-3502
和歌山県東牟婁郡串本町潮岬2838-3

絵 大江 みどり

編集・印刷 中和印刷紙器株式会社

無断複製・転載を禁じます。

この絵本の挿絵の一部には
物語にでてくる実際の場所にある
石や草木の上に紙を置いて模様をこすり写す
フロッタージュという技法を
用いた表現が使われています。
現地から生まれた素材だからこそ
伝えることができるものを
感じてもらうことができれば
嬉しいです。

大江 みどり

ひこ ご ろう つつみ
彦五郎の堤



むかし とん だ がわ おおみず で た はたけ なが
昔はない、富田川はよう大水出て、そのたんびに田んぼや畑が流されてん。
むら ひと おおあめ くず つつみ おも
ほいでに村の人は、大雨にも崩れんがんじょうな堤ほしなあて思いやってん。
とし おおみず で ひと うま なが し
ある年もまた大水出てない、人も馬も流されて死ぬし、
た はたけ う め
田んぼも畑も埋まってしまうような目におうてんとう。

むら ひと
そいで村の人はもう、
こん ど つつみ
今度こそがんじょうな堤ほしいちゅうんで、
うじがみ ねが
氏神さんにまいってお願いしてん。



ゆめまくら かみ あらわ
ほいたら夢枕に神さんが現れて

つつみ ひとばしら た
「堤に人柱を立てよ。

つつみ あんぜん い
そいたら堤は安全や」て言うてんとう。

ひとばしら かみ ころ なぐさ
人柱ちゅうのは、神さんの心を慰むるちゅうて、

い ひと つち なか う
生けたある人を土の中に埋めることやぜ。



ほな、いったい^{ひとばしら}だいを人柱にするんなよ、村^{むら}の人は
なん^{なん}も^よあ^あ寄り合^きいしてんけど、いっこも決^きまらんねら。
ほいたら、その場^ばにいた彦五郎^{ひこごろう}はんがさって立^たち上^あがって
「こんが^{そうだん}に相談^{ひと}しても人^{ひと}がないんやったら、
わしに^{かんが}考え^いあるんやけど、言^いうてもええか」
て言^いうてんとう。



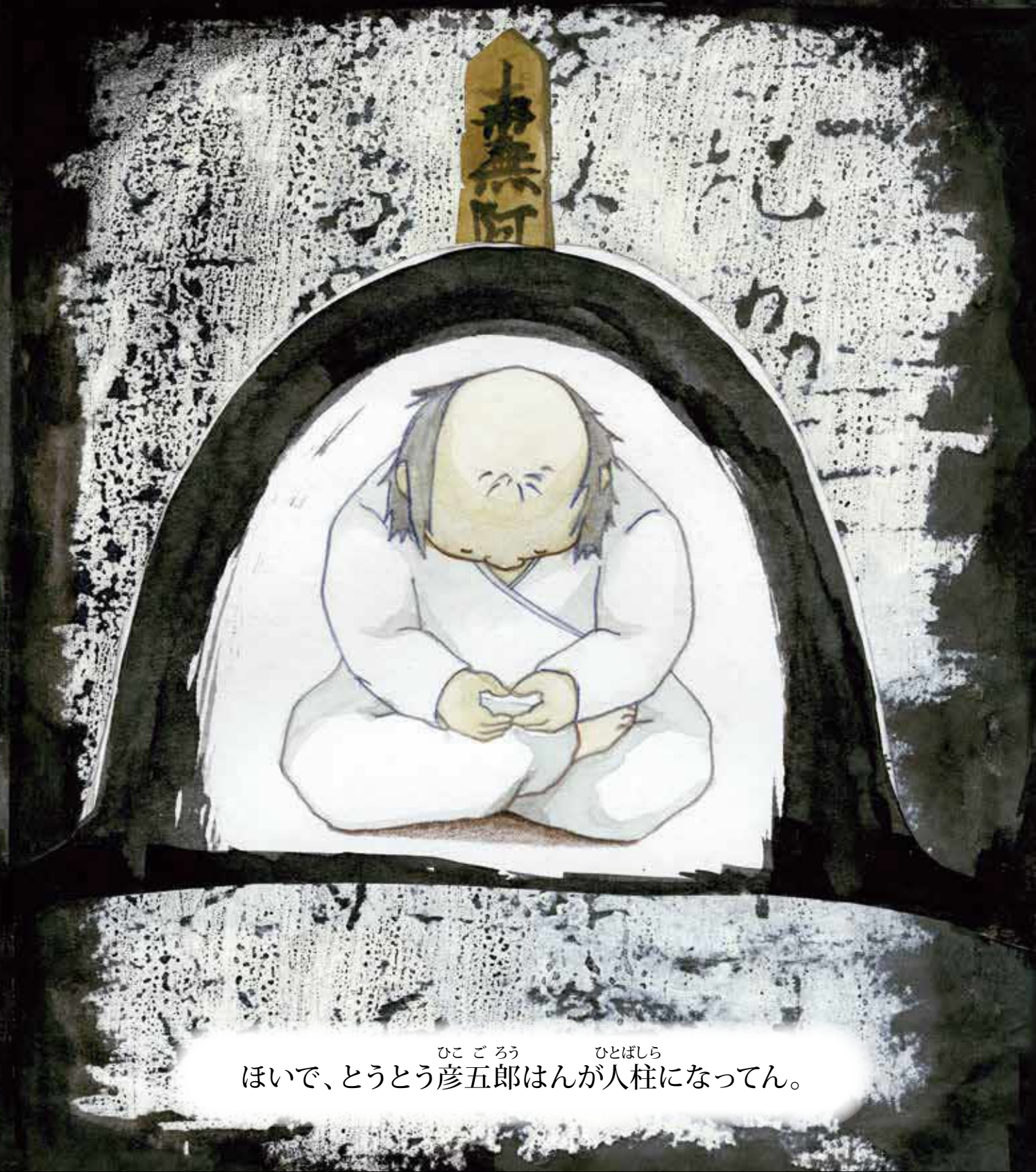
村^{むら}の人は、日^ひごろ無^む口^{くち}な彦五郎^{ひこごろう}が、急^{きゅう}に大^{おお}きな声^{こえ}でしゃべり出^だいたんでびっくりして
そっち^み見たら、不^ぶ精^{しょう}ひげいっぱい生^はやいた顔^{かお}を、赤^{あか}茶^{ちゃ}けた手拭^{てぬぐい}の端^{はし}で拭^ふきもて
「わし^{おも}が思^{おも}うに、あが^{ひとばしら}から人柱^{ひと}になりたい^{ひと}という人^{ひと}らおらんやろ。ほいで、この場^ばで、
着^き物^{もの}のつぎが横^{よこ}継^つぎにあ^{ひと}た^{ひと}ったある人^{ひと}あ^{ひと}たら、その人^{ひと}に人柱^{ひとばしら}にな^いってもら^いおら」
て言^いうんや。



むら ひと
村の人ら、なっとうしょうかてよわりこんだあったもんやさか、
そいはええ考えやちゅうて、みんなお互いの着物のつぎ見せおうてんとう。

ほいたら、なんとまあ、
い だ ひこごろう
言い出いた彦五郎はんの
きもの よこつ
着物にがいな横継ぎの
つぎが当たったあってんとう。





ひこごろう ひとばしら
ほいで、とうとう彦五郎はんが人柱になってん。



とんだがわ ていぼう
そいからこっち、富田川の堤防は

あめ ふ き
どんがにえらい雨降っても切れんようになってんとう。

ていぼう いま ひこ ごろうていぼう
その堤防は今も彦五郎堤防ちゅうんや。

ひこ ごろう ひと
ほいから彦さんと五郎さんのおとついやったていう人もあら。



こう こう せい
高校生がジオパークで学ぶ

しぜん れきし ほうさい
自然・歴史・防災

ひこ ご ろう てい ぼう おとず
～彦五郎堤防を訪れて～



わたし わ か やま けん りつ くま の こう とう がっ こう
私たち和歌山県立熊野高等学校サポーター
ズリーダー部では、ジオパークの活動に取り
組んでいます。
こん かい がっ こう ちか ひこ ご ろう てい ぼう みん わ
今回、学校の近くにある彦五郎堤防の民話を
もとにした絵本製作を通して、地域の方々と
いっしょ へん せい さく とお ち いき かた がた
一緒にふるさとの歴史や自然について学び
ました。
とん だ がわ すい がい ふか し
富田川の水害についても深く知ることがで
き、防災の重要性を再認識しました。



こん ご わたし こん かい まな
今後、私たちは今回の学んだことを
せっきよくてき おお かた つた
積極的に多くの方に伝えていきたいと
おも 思います。



なん き くま の
南紀熊野ジオパークのガイドさんや
ち いき かた がた ひこ ご ろう てい ぼう
地域の方々に彦五郎堤防について
おし 教えてもらいました。

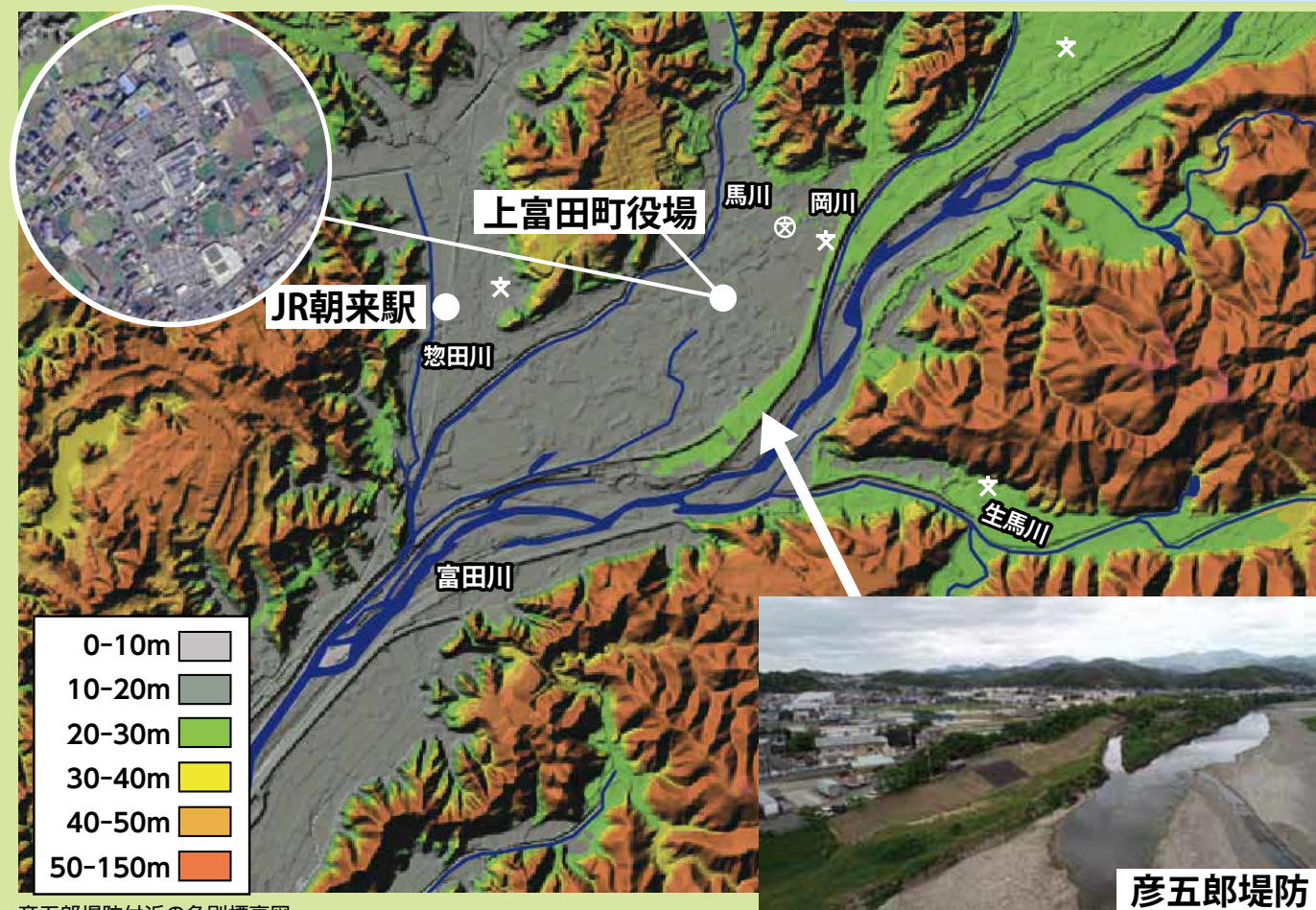
え ほん わたし じっ さい ひこ ご ろう てい ぼう
この絵本では私たちが実際に彦五郎堤防で
そ ざい いち ぶ つか
フロッタージュしたものが、素材の一部として使われています。



お話^{はなし}で出てきた場所^{ばしょ}はどんなところ？

彦五郎堤防^{ひこごろうていぼう}

上富田町にある彦五郎堤防は長さは約1kmで、作られた正確な時期はわかりませんが、16～17世紀頃だと考えられています。彦五郎堤防からJR朝来駅にかけて、昔の洪水によって作られた平らな土地が広がっています。彦五郎堤防があることで、川があふれにくくなり、田んぼや畑、住宅地として利用しやすくなっています。



彦五郎堤防付近の色別標高図



彦五郎堤防

民話とは、昔の人が口から口へと語り継いできたものです。語り継がれてきたものなので、いろいろな話が存在しています。本書に収録した民話は、そのうちのひとつで、上富田弁で書いています。

彦五郎の堤

昔はね、富田川はよく大洪水が起こり、そのたびに田んぼや畑が流されてしまった。それで村の人は、大雨にも崩れないしっかりした堤防が欲しいと思っていた。

ある年もまた大洪水が起こり、人も馬も流されて死んでしまうし、田んぼも畑も埋まってしまうような被害を受けた。そこで村の人はもう、今度こそしっかりした堤防が欲しいということで、氏神様に参ってお願いした。すると夢枕に神様が現れて「堤防に人柱を立てよ。そうすれば堤防は安全だ」と言ったそうだ。人柱というのは、神様の心を慰めるために、生きた人を土の中に埋めることである。

さて、いったい誰を人柱にしようかと、村の人は何度も集まって話し合ったが、なかなか決まらなかった。すると、その場にいた彦五郎さんがさっと立ち上がって「こんなに相談しても人が決まらないのであれば、私に考えがあるのだけど、言ってもよいか」と言った。村の人は、普段無口な彦五郎さんが、急に大きな声で話し始めたので驚いてそちらを見ると、不精ひげをいっぱい生やした顔を、赤茶けた手拭の端で拭きながら「私が思うに、自ら人柱になりたいと言う人はいないでしょう。そこで、この場で、着物のつぎが横継ぎになっている人がいたら、その人に人柱になってもらおうではないか」と言うのだ。

村の人々は、どうしようかと困っていたため、それは良い考えだということで、みなでお互いの着物のつぎを見せ合った。すると、なんと、言い出した彦五郎さんの着物に大きな横継ぎのつぎが当たっていた。こうして、とうとう彦五郎さんが人柱になった。

それ以来、富田川の堤防はどんなに大雨が降っても決壊しなくなったそうだ。その堤防は今も彦五郎堤防と呼ばれている。それから（この話は）彦さんと五郎さんの兄弟だったと言う人もいるそうだ。